

千葉県こどもの生活実態調査 結果概要（速報版）のポイント

※緑文字は前回調査の数値

調査概要

1 目的

千葉県内に住む小学5年生及び中学2年生とその保護者を対象に勉強時間・場所、放課後の過ごし方、勉強の理解度、保護者の学歴、就業の状況・収入、児童相談所やスクールカウンセラーといった自治体の相談体制に対する認知度・利用度等、教育や生活に関連する調査を行い、その結果を取りまとめた。

2 実態調査票の配布及び回答数

実態調査票については、人口規模や地域性のバランスを考慮し、県内の14市町村（柏市、成田市、旭市、八千代市、我孫子市、鴨川市、鎌ヶ谷市、富津市、四街道市、匝瑳市、山武市、多古町、睦沢町、長生村）に配布。当該回答に加えて、君津市が同時期に本調査と同様の設問を含めて実施した「君津市こどもの生活状況調査」の回答を統合し、計15市町村の回答結果の集計・分析を行った。

配布数	こども票・保護者票 各 19,728 件 うち小学5年生：9,931 件 中学2年生：9,797 件
回答者数	こども票 7,127 件 うち小学5年生：3,605 件 中学2年生：3,401 件 学年不明：121 件 保護者票 7,275 件 うち小学5年生：3,887 件 中学2年生：3,372 件 学年不明：16 件
回答率	こども票 36.1% うち小学5年生：36.3% 中学2年生：34.7% 保護者票 36.9% うち小学5年生：39.1% 中学2年生：34.4%

3 生活困難度の定義（参考：平成 28 年度東京都子供の生活実態調査）

本調査では、こどもの「生活困難」にかかる 3 要素を以下のとおり定義した。

①低所得	<p>等価世帯所得が厚生労働省「2023（令和 5）年国民生活基礎調査」から算出される基準未満の世帯と定義する。</p> <p><低所得基準> 世帯所得の中央値 405 万円 ÷ √平均世帯人数（2.25 人） × 50% = 135.0 万円</p>
②家計の逼迫	<p>保護者票において、以下の 7 項目中、1 つ以上が該当する場合と定義する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 過去 1 年以内に経済的な理由で電話料金の滞納があった 2. 過去 1 年以内に経済的な理由で電気料金の滞納があった 3. 過去 1 年以内に経済的な理由でガス料金の滞納があった 4. 過去 1 年以内に経済的な理由で水道料金の滞納があった 5. 過去 1 年以内に経済的な理由で家賃の滞納があった 6. 過去 1 年以内に「家族が必要とする食料が買えなかった経験」があった 7. 過去 1 年以内に「家族が必要とする衣類が買えなかった経験」があった
③こどもの体験や所有物の欠如	<p>保護者票において、過去 1 年以内にこどもの体験や所有物に関する以下 15 項目のうち、経済的な理由により欠如している項目が 3 つ以上ある場合と定義する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 海水浴に行く 2. 博物館・科学館・美術館などに行く 3. キャンプやバーベキューに行く 4. スポーツ観戦や劇場に行く 5. 遊園地やテーマパークに行く 6. 毎月おこづかいを渡す 7. 毎年新しい洋服・靴を買う 8. 習い事（音楽、スポーツ、習字等）に通わせる 9. 学習塾に通わせる（または家庭教師に来てもらう） 10. お誕生日のお祝いをする 11. 1 年に 1 回くらい家族旅行に行く 12. クリスマスのプレゼントや正月のお年玉をあげる 13. こどもの年齢にあった本 14. こども用のスポーツ用品・おもちゃ 15. こどもが自宅で宿題（勉強）をすることができる場所

上記 3 つの要素について、該当する要素の数に応じて以下のとおり生活困難度を分類した。

困窮層	2 つ以上の要素に該当
周辺層	いずれか 1 つの要素に該当
一般層	いずれの要素にも該当しない

なお、上記 3 要素についてひとつでも欠損がある場合は無効としたため、生活困難度を算出できるサンプルは 5406 件（保護者票ベース）となった。

調査結果

1 困窮層の割合（前回調査との比較）

(1) 困窮層・周辺層・一般層の割合（保護者票ベース）

	全体		小学5年生のいる世帯		中学2年生のいる世帯	
	件	割合	件	割合	件	割合
① 困窮層	522	9.7% (+2.8)	264	9.0% (+2.9)	257	10.4% (+2.2)
	337	6.9%	183	6.1%	154	8.2%
② 周辺層	694	12.8% (+0.5)	360	12.3% (+0.9)	333	13.4% (-0.4)
	600	12.3%	342	11.4%	258	13.8%
小計 (①+②)	1,216	22.5% (+3.3)	624	21.4% (+3.9)	590	23.8% (+1.8)
	937	19.2%	525	17.5%	412	22.0%
③ 一般層	4,190	77.5% (-3.3)	2,297	78.6% (-3.9)	1,890	76.2% (-1.8)
	3,932	80.8%	2,473	82.5%	1,459	78.0%
合計 (①+②+③)	5,406	100.0%	2,921	100.0%	2,480	100.0%
	4,869	100.0%	2,998	100.0%	1,871	100.0%

⇒前回調査(R1)に比べ、全体的に困窮層・周辺層の割合が増加(悪化)している。

(2) 要素別の割合（保護者票ベース）

	全体		小学5年生のいる世帯		中学2年生のいる世帯	
	件	割合	件	割合	件	割合
①低所得	294	5.4% (+1.3)	141	4.8% (+1.0)	151	6.1% (+1.4)
	201	4.1%	113	3.8%	88	4.7%
②家計の逼迫	763	14.1% (+1.7)	407	13.9% (+2.6)	356	14.4% (+0.2)
	606	12.4%	340	11.3%	266	14.2%
③こどもの体験 や所有物の欠如	790	14.6% (+4.6)	394	13.5% (+4.1)	395	15.9% (+3.4)
	516	10.6%	282	9.4%	234	12.5%

⇒前回調査同様に、②家計の逼迫と③こどもの体験や所有物の欠如の割合が高い。

⇒前回調査(R1)に比べ、全ての要素の割合が増加(悪化)している。

特に、③こどもの体験や所有物の欠如の増加(悪化)が著しい。

(3) 困窮層・周辺層の構成要素別内訳（全体・保護者票ベース）

		件	%	件	%	
困窮層	3つに 該当	①低所得+②家計の逼迫+③こどもの体験 や所有物欠如	109	2.0% (+1.0)	522	9.7% (+2.8)
			49	1.0%		
	2つに 該当	①低所得+②家計の逼迫	28	0.5% (-0.1)		
		①低所得+③こどもの体験や所有物欠如	28	0.6%		
		②家計の逼迫+③こどもの体験や所有物 欠如	50	0.9% (+0.4)		
			26	0.5%		
周辺層	1つに 該当	① 低所得	107	2.0% (±0)	694	12.8% (+0.5)
			98	2.0%		
		② 家計の逼迫	291	5.4% (-0.7)		
	295	6.1%	600	12.3%		
③ こどもの体験や所有物欠如	296	5.5% (+1.2)				
		207	4.3%			
困窮層と周辺層の計				1,216	22.5% (+3.3)	
				937	19.2%	

⇒前回調査に比べ、③こどもの体験や所有物の欠如に絡んだ困窮層・周辺層が特に悪化している。

2 主な調査結果

1 生活の安定に資するための支援

(1) 生活困窮の状況

《全体の状況》

- ・ 自宅で宿題をすることができる場所や自分専用の勉強机などの勉強に適した環境や、友達が着ているのと同じような服、2足以上のサイズのあった靴など日常生活を送る上で重要なものを所有するこどもの割合は、一般層に比べて困窮層の方が低い。
- ・ 急な出費のための貯金ができているという割合は、困窮層で約6割にのぼる。
- ・ 10年前の生活が大変苦しいと回答した保護者の割合は、一般層に比べて困窮層の方が高い。

《結果概要》

- ・ 困窮状況により物品の所有状況には差がみられ、こどもの学習や日常生活に影響が出ている可能性がある。
- ・ また、生活の困窮は長期に渡り継続している傾向がみられる。

(2) こどもの生活の状況

《全体の状況》

- ・ 中学生について、午前0時以降に就寝すると回答したこどもの割合は、一般層に比べて困窮層の方が高い。 ←前回調査では「小学生」にも有意な差が見られていた。
- ・ 平日に毎日朝ご飯を食べる割合は、一般層に比べて困窮層の方が低い。
- ・ 野菜を毎日食べるこどもの割合は、一般層に比べて困窮層の方が低く15～20ポイントの差がある。同様に、肉か魚を毎日食べるこどもの割合は、一般層に比べて困窮層の方が低く約15ポイントの差がある。
↳前回調査では「肉・魚」の摂取頻度にこれほど大きな差は見られなかった。
- ・ こどもがくだものを食べる頻度は、(小・中学生ともに)一般層に比べて困窮層の方が少ない。 ←前回調査では「中学生」の有意差がやや低かった(p<.05)。
- ・ カップめん・インスタント麺を食べないこどもの割合は、(小・中学生ともに)困窮層に比べて一般層の方が高い。 ←前回調査では「中学生」の有意差がやや低かった。
- ・ お菓子を毎日食べるこどもの割合は、小学生については一般層に比べて困窮層の方が低く11ポイントの差がある。一方、中学生については周辺層が最も高く、最も低い困窮層とは約12ポイントの差がある。←前回調査では「小学生」有意差なし

《結果概要》

- ・ 困窮層のこどもほど、睡眠・食事などの基本的な生活習慣において課題がみられる。睡眠については、困窮層のこどもほど夜遅くまで起きているという傾向がみられる。また、食事については、困窮層のこどものほど毎日朝ご飯を食べておらず、野菜や魚・肉を食べる頻度も低いという傾向がみられる。

(3) こども及び保護者の健康・自己肯定感

≪全体の状況≫

- ・こどもを医療機関で受診させた方がよいと思ったが、実際には受診させなかったことがあったと回答した保護者の割合は、一般層に比べて困窮層の方が高い。
特に、中学生については一般層に比べて困窮層の方が約 10 ポイント高い。
↳前回調査では「中学生」にこれほど大きな差は見られなかった。
- ・「がんばれば、むくわれる」「自分は価値ある人間だ」「自分は家族に大事にされている」と「とても思う」こどもの割合は、一般層に比べて困窮層の方が低い。
↳前回調査では「自分は家族に大事にされている」について小学生は有意差 $p < .05$ 、中学生は有意差なしだったが、今回調査では小学生 $p < .05$ 、中学生 $p < .01$ と有意差が高くなっている。
- ・また、中学生については、「自分は友達に好かれている」「自分のことが好きだ」と「とても思う」こどもの割合は、一般層に比べて困窮層の方が低い。
- ・さらに、中学生については、「孤独を感じることもある」と「とても思う」こどもの割合は、一般層に比べて困窮層の方が高い。 ←前回調査では有意差なし
- ・健康状態が良いと回答した保護者の割合は、一般層に比べて困窮層の方が低く、20 ポイント以上の差がある。 ←前回調査ではこれほど大きな差はみられなかった。
- ・健康診断やがん検診を定期的を受けていると回答した保護者の割合は、一般層に比べて困窮層の方が低く、費用面を理由に挙げる割合が高い。
- ・「がんばればむくわれる」「自分は価値のある人間だ」「目標や計画は達成できる」「積極的に色々な人と話したい」「今後の人生が楽しみだ」「自分のことが好きだ」と思わない保護者の割合は、一般層に比べて困窮層の方が高い。
- ・また、「不安を感じることもある」「孤独を感じることもある」と「とても思う」保護者の割合は、一般層に比べて困窮層の方が高い。
↳前回調査では、保護者の「不安を感じることもある」に有意差はなかった。
(保護者の自己肯定感に関する質問の中で、唯一有意差のない項目だった。)

≪結果概要≫

- ・困窮層ほど、費用負担を理由としてこどもの医療機関受診や保護者自身の健康診断等の受診を抑制する傾向がみられる。
- ・また、困窮層の保護者ほど、健康状態がよくないという傾向がみられる。
- ・これらのことにより、健康状態の悪化が懸念され、医療費負担の増大や保護者が働けなくなるリスクが高まり、状況がより深刻になる可能性がある。
- ・また、保護者自身の自己肯定感が、困窮層においては低いことを踏まえると、こどもの自己肯定感を高められない家庭があることが推測される。

(4) 保護者と子ども・地域との関わり

《全体の状況》

- ・おうちの大人と一緒に朝食をたべる機会がほぼないと回答した子ども割合は、一般層と比べて困窮層の方が高い。
- ・おうちの大人と一緒に夕食をたべる機会が毎日と回答した割合について、中学生は、一般層と比べて困窮層の方が低い。←前回調査では小学生にも有意差あった(p<.05)。
- ・おうちの大人と一緒に遊んだり体を動かしたりする機会がほぼないと回答した割合について、小学生は、一般層と比べて困窮層の方が高い。
- ・おうちの大人と学校生活の話をする機会について、小学生は、一般層に比べて困窮層の方が、回数が少ない傾向にある。
- ・おうちの大人とニュースなど社会の出来事の話をする機会がほぼないと回答した子どもの割合は、一般層に比べて困窮層の方が高い。
- ・困ったときや悩みがあるときに相談できる相手がいないと回答した保護者の割合は、一般層に比べて困窮層の方が高い。
- ・近隣に、挨拶や日常的な会話をする知人や友人がいないと回答した保護者の割合は、一般層に比べて困窮層の方が高い。
- ・近隣に、子育てに関する悩みや相談をできる知人や友人がいないと回答した保護者の割合は、一般層に比べて困窮層の方が高い。

《結果概要》

- ・困窮層の家庭は家族間のコミュニケーションや外部とのコミュニケーションが少なく、孤立していることがある。孤立してしまい相談できる相手がいない世帯は、困窮の初期段階にあっても周囲が気づかず見落とされてしまう可能性がある。

(5) 保護者のこれまでの経験

《全体の状況》

- ・15歳頃の暮らし向きが「やや苦しかった」「大変苦しかった」と回答した保護者の割合は、一般層に比べて困窮層の方が高い。
- ・親から暴力を振るわれたことがあると回答した保護者の割合は、一般層に比べて困窮層の方が高い。(図表 53)
- ・子どもに行き過ぎた体罰を与えたことがあると回答した保護者の割合は、一般層に比べて困窮層の方が高い。

《結果概要》

- ・困窮している家庭環境は世代を超えて連鎖することがある。

2 教育の支援

(1) こどもの学びの状況

《全体の状況》

- ・学校の授業が分からないと感じるこどもの割合は、一般層に比べて困窮層の方が高く、中学生ではその傾向が顕著である。
- ・自宅で宿題ができる場所がない、欲しいと回答したこどもの割合は、一般層に比べて困窮層の方が高い。
- ・学校の授業が「あまりわからない／わからないことが多い／ほとんど分からない」と回答した者のうち、中学生において、勉強が分からないときに塾や習い事の先生が教えてくれると回答したこどもの割合は、一般層に比べて困窮層の方が低い。
- ・学習塾に通っていないこどもの割合は、一般層に比べて困窮層の方が高い。
- ・学校の授業以外の勉強時間は、一般層に比べて困窮層の方が少ない。
- ・将来、大学またはそれ以上まで進学したいと回答した中学生の割合は、一般層に比べて困窮層の方が低い。

《結果概要》

- ・困窮状況によって授業の理解度や学校外での学習環境・勉強時間に差がみられ、中学生においてその差が顕著に確認された。
- ・また、中学生の進学希望にも差があり、困窮が影響して進学を諦めるこどもが一定数いることが推測される。

3 保護者に対する職業生活の安定と向上に資するための就労支援

(1) 保護者の就労状況

《全体の状況》

- ・小学生において、母親の就業状況は「パート・アルバイト」の割合が一般層よりも困窮層・周辺層において高くなっているが、中学生においては困窮状況による差がみられない。←前回調査では中学生にも有意差があった(p<.05)。

全体として正社員・正職員の母親の割合の増加が影響したものと考えられる。

- ・困窮層の場合、父親の就業形態は「民間企業の正社員」「公務員などの正職員」の割合が一般層での割合よりも低くなっている。

《結果概要》

- ・困窮層、周辺層、一般層の違いは、母親の就業状況よりも父親の就業状況との関係が強くみられる。

4 経済的支援

(1) 経済的支援の利用状況

《全体の状況》

- ・困窮層において、多くの支援制度について「利用したいと思ったことがなかった」がかなりの割合を占めている。また、困窮層、周辺層において「利用しなかったが条件を満たしていなかった」や「制度等について全く知らなかった」と回答した保護者が一定数存在する。
- ・児童扶養手当、就学援助費については、困窮層においても「現在利用している」と「利用したことがある」を合わせた割合がそれぞれ、4割程度、4割弱となっている。

《結果概要》

- ・貧困層に対して、各種の経済的支援が行き届いていない状況がみられる。

5 支援につなぐ体制整備

(1) 子育て支援制度・相談機関の利用状況

《全体の状況》

- ・こどもの所有物について、困窮層に比べて一般層の方が所有している割合が高い傾向がある一方で、(小・中学生ともに)スマートフォンなど、困窮層でも高い割合で所有しているものもある。↳前回調査では中学生のみだった。
- ・こどもに関する支援制度等の情報の受け取り方法で最も割合の高いものは「学校からのお便り」。「行政の広報誌」や「学校からのメール」、「家族・友人」から情報を受け取っている割合は一般層に比べて困窮層の方が低い。
- ・公的機関の中で保護者が相談した経験があると回答した割合が最も高かった相談先は「学校や幼稚園、保育園の先生」。一方、学校や幼稚園、保育園の先生に対し「相談したかったが抵抗感があった」と回答した保護者の割合は、一般層に比べて困窮層の方が高い。
- ・小中学生いずれの保護者も、スクールカウンセラーに対して「相談したかったが抵抗感があった」、「相談する窓口や方法がわからなかった」と回答した割合は一般層に比べて困窮層で高い。
- ・子育て支援サービスの中で保護者が「利用したことはないが興味がある」とする割合がもっとも高いのは「こども食堂」であり、小学生においては特に困窮層・周辺層で関心が高い。↳前回調査では「学校以外が実施する学習支援」が1位だった。

《結果概要》

- ・所有しているものや外見だけでは判断できない貧困がある。
- ・こどもに関する支援制度等の情報の受け取り先や、相談する先としていずれも学校が中心となっているが、困窮層ほど学校への相談に対して抵抗感を感じ、相談できていない可能性がある。
- ・また、各支援サービスの中で、特にこども食堂への関心が高まっているものの、必要な人にまで届いていない可能性がある。

6 新型コロナウイルス感染症の影響←新規の調査項目

(1) 新型コロナウイルス感染症の影響について

《全体の状況》

- ・新型コロナウイルス感染症が流行し始めた頃（2020年頃）とそれまでの変化を聞いたところ、小中学生いずれの保護者においても、「世帯全体の収入」が減ったと回答した割合や、「お金が足りなくて必要な食料や衣服を買えないこと」「保護者自身がイライラや不安を感じたり、気分が沈むこと」が増えたと回答した割合は、一般層よりも困窮層で高い。
- ・子どもにおいては、小中学生いずれも、「学校の授業がわからないと感じること」が増えたと回答した割合は、一般層よりも困窮層で高い。

《結果概要》

- ・新型コロナウイルス感染症による影響は特に困窮層において大きかった。
- ・困窮層の保護者は経済面・メンタル面で大きな影響を受けていた一方、子どもにおいては休校等による学習の遅れの格差が拡大していたことが推察される。